

1997年2月1日(土)～2月27日(木)
●寄贈品 コ ー ナ ー

「鋤物語～くわものがたり～」

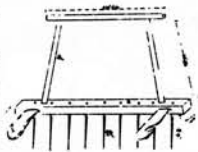
「鋤は百姓の刀である」といわれたように、農具の要でした。平塚で使われた様々な種類の鋤の用途を紹介します。

期間：2月1日(土)～2月27日(木)

まんがの話-寄贈品コーナー「鋤物語」展<2月1日(土)~2月27日(木)>にちなんで-

マンガってなんですか?決まってるじゃないか、漫画だろう?なんて言ってるようじゃ、まだまだ平塚の地に根を生やしているとはいえませんよ。お百姓さんに尋ねてみてください。「マンガか、そりゃあマンガックワだ。昔ゃあ、みんなマンガで田をうなったもんだ」「千歯こきのこともマンガって言いますよね?」「なんだ、そりゃあ」「ほら、稲をこいたり麦をこいたりする、刃がいっぱい……」「稲こきだ。稲こきマンガ、麦こきマンガとも言ってるな、麦用のマンガは稲用より刃の間が広がった。種籾を採るにはしばらく使ったな」。というようにもし平塚方言辞典を作ったとしたら「マンガ」あるいは「マンガー」の事項には、マンガックワと稲こき・麦こきの2種の農具の記載がなければならないのです。さらに、平塚にはコマンガ、フリマンガと呼ばれる農具もあり、マンガの仲間は4種類を数えることとなります。それではいったい、これらの農具に共通点はあるのか?また、なにゆえマンガと呼ばれるのでしょうか?

馬鋤 試みに広辞苑でマンガを引くと「漫画」の他に「馬鋤:マグワの訛」と載っているので、マグワを引くと「マグワ:わが国在来の農具の一。牛馬にひかせて土を砕いたりならしたりするに用いる。長さ約1メートルの横木に約20センチメートルの鉄製の歯10本内外を植え、これに鳥居形の柄をつけたもの。まんが。」とあります。呼び名についてはウマグワ→マグワ→マンガになったことが容易に想像されます。田のシロカキに用いる道具で、一般には農具でマンガといえはこの「馬鋤」を指します。ですが、平塚では馬鋤をマンガと呼ぶことは稀で、たんにシロカキ機などと呼んでいました。マンガの仲間は4種類もあるのに、なぜ馬鋤はマンガの仲間入りができなかったのでしょうか?



明治40年の統計書から県内の牛馬耕の状況を郡別に見ると、牛馬耕を導入している田地面積の割合は、橋樹郡の51^{ha}-セトに比べ、わが中郡は0.03^{ha}-セトに過ぎず、畑では中郡はゼロです。さらに耕作用の牛馬頭数は三浦郡の1541に比し、中郡はわずかに馬が25頭だけと、明治期の平塚市域では農耕用の牛馬は皆無に等しい状況であったことが分かります。牛馬耕の本格的な導入は、暗渠排水が整備されドブ田が乾田化するまで待たねばならず、大正末から徐々に普及し始めたものの、多くの農家で使うようになったのは戦後からでした。田での牛馬耕はシロカキの他に、スキを使う田起こしがありました。70代以上の人は若い頃には手で(マンガーや鋤で)田をうなったものだと語ります。シロカキについても鋤で行っていた長い歴史に比べれば、牛馬に引かせるシロカキはほんの一時期に過ぎません。このように、平塚市で馬鋤をマンガと呼ばなかった理由は、牛馬耕の導入が遅れたためといつてよいと思います。ただし、市内には170基程の馬頭観音が建てられているように、馬とのつきあいは古くからありました。馬は農耕用ではなく、駄馬として、また堆肥を作るために飼われていたのです。マンガー 刃が4本に分かれた鋤を指し、マンガックワともいいます。主に田の耕起に使い、芋堀にも用いました。現在も畑で使われています。県内での呼称はマンノウと呼ぶところが多いものの、相模川以东にはシホンクワなど刃の数を示す呼称、県西南部にマンガが分布しています。

コマンガー クマンガーとも呼びます。デッキブラシのような形状の柄と台に鉄製の釘状の刃

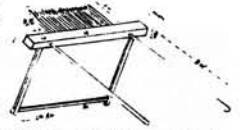


をつけたもので、畑の土を砕いて均したり、麦の刈株をひっこめくのに使いました。呼称は県東部にムツバなど刃の数を示すものとコマンノウ、相模川以西はコマンガーの分布域です。

フリマンガ ヨコップリともいい、形状は馬鋤によく似ています。水田裏作に小麦を作るとき、鋤でうなった後の土塊をこれで砕きました。



稲コキ・麦コキマンガ 稲や麦の穂を刃の間に通して、穀粒を落とす脱穀用具です。この後足踏み式の脱穀機に替わりました。呼称はカナゴキが県東部、県央はセンバ、西南部はマンガ・マンノ一地域です。



マンガという呼称 以上4種のマンガ類は県内では相模川以西の南部に濃密に分布しており、さらにマンノウの分布とも重なる場合があります。マンノウとマンガの呼称には大いに関連がありそうです。また、馬鋤は県内でも牛馬耕が盛んだ地域ではマンガの呼称が与えられています。センバコキをマンガと呼ぶのが最大の謎ですが、これは馬鋤をひっくり返した形に似ているからというちょっと信じがたい説もあります。

マンガの“ガ”は、“グワ”が縮まった音で、市内にはマンガ以外にもオング、トンガといった鋤があります。マンガ類の共通点は、いずれも鉄製の刃(昔は竹製だったものもある)が数本ついた農具ということになりますが、これが解決の糸口となるかは分かりません。ただ、万能・万石(千石)・千歯・万力など作業効率が良い新種(といっても近世)の道具に大きな数を名称としてつけた傾向があります。こう考えるとマンガの呼称には、馬と万の2系統があるといえるかもしれません。

マンガレー マンガの呼称を問題にするのは、ただ種類が多いからだけではありません。実はかつて7月の半ば、田植えが済み、畑仕事も一段落した頃にマンガレー、正しくはマンガ洗いという農休日がムラごとに出されました。マンガ洗いという呼称の通り、農繁期の間活躍したマンガを洗って並べ御馳走を供えて感謝する行事です。さて、ここで問題になるのがどのマンガを対象にしたかということで、家や地域によって万能・コマンガ・千歯とばらつきがあります。万能としたら田うないが済んだ祝いとなり時期的には遅く、コマンガならちょうど寸前に麦の刈株をあげるのでグッドタイミングなのですがお祝いする程の農具であるかどうか、千歯なら麦の脱穀祝いということになります。足柄上郡には12月にもマンガアレーをする所があり、その際には千歯に供えました。市内のマンガレーは特定のマンガだけでなく、鋤などにもお供えした家が多かったようです。しかし、戦後はほとんどやられなくなり、伝承はかなり薄らいでしまっています。

マンガレーは川崎市や足柄上下郡にもあり、馬鋤に感謝する祝いとしていた場合が多いです。平塚市の場合、マンガレーという呼称自体は馬耕先進地帯から入ってきたとしても、実際に行事の対象とした農具は一つに限定していなかったのではないかと思います。

さらに、田植え後にやはりムラ単位で出されるノアガリの休日との関連も考えてみたい問題です。

鋤物語展 様々な種類の鋤を展示し、その用途や使用法を紹介している今回の寄贈品コーナーにこじつけて、マンガの話を展開してみました。

<農具図はすべて『明治三八、九年農具一覧 に図解』(平塚市博物館 昭和60年)による>